

2004 年度卒業研究

学籍番号	氏 名	卒業論文タイトル
10114022	大谷 玄	ゴルフ場と農薬汚染—生態系を破壊しないために—
10114023	大西麻里子	自然治癒力の再評価—生命の全体性への気づき—
10114039	北村大輔	食糧問題と環境汚染 - 食環境の改善に向けて -
10114041	久保田恵	現代の母と娘の関係
10114048	小林祥子	変化する家族 —「個」の確立を目指して—
10114048	高木敬子	色彩環境が与える力
10114082	西村有加里	身体におけるコミュニケーション - 五感を通じた感性を高めるために -
10114091	深澤 愛	人間と野生生物との共生をめざして
10114103	宮田絵里	
10114113	養老弘貴	環境問題解決に向けて —環境問題を取り上げ新たなライフスタイルを模索する—

はじめに

第一章 ゴルフ場の農薬使用の実態とその背景

第一節 ゴルフ場乱開発の歴史と農薬使用の背景

第二節 ゴルフ場で使用される農薬とその毒性

第三節 国・自治体による農薬の規制

第二章 無農薬ゴルフ場は可能か

第一節 無農薬宣言

第二節 安全な農薬使用法の模索

第三節 無農薬ゴルフ場の現状

第三章 生態系を破壊しないために

第一節 ゴルフ場の存在意義 —地域の活性化と村おこし—

第二節 農薬以外の「ゴルフ場問題」—森林破壊の観点から—

第三節 これからのゴルフ場のありかた —里山との共存—

おわりに

要約

現在、日本は約 2500 箇所ものゴルフ場と一千万人以上のゴルフ人口を抱え、いまやゴルフというスポーツは日本人の生活の中にすっかり浸透している。しかし、ゴルフ場というものはその造成から運営まで様々な問題を抱えている。この論文では、農薬問題を中心としてそれらの問題について述べ、これからのゴルフ場がどうあるべきかを考察していく。

ゴルフ場で大量に農薬が使用されるようになった主な理由としては、1960 年代のゴルフ場開発ブームによってゴルフ場の数が爆発的に増加し、全国的に芝生の供給が不足したため、北米から西洋芝を輸入した事が挙げられる。西洋芝は日本の高温多湿気候の下での生育が難しく、殺虫剤、殺菌剤、除草剤などを大量に必要としたのだ。

そして、それらの農薬はヘリコプターやスピードスプレーヤーを用いて散布されたため、大気中に拡散した農薬が人体に様々な悪影響を与えたほか、大雨によって流された農薬が河川に流出し、下流にあった養魚場の魚が全滅するという事件も起こった。

これに対して国や自治体は農薬取締法の制定や登録農薬のシステムを作り、今日では農薬問題は減少してきているが、問題解決のために最も必要なのは、農薬使用者の環境への配慮だと思われる。

そんな中、1990 年に千葉県知事が「無農薬宣言」を発表、県下のゴルフ場の無農薬化を推し進めた。それをきっかけとしてバイオ農薬や漢方農薬の技術開発が進められ、化学農薬の使用量は減少し、県外でも無農薬運営のゴルフ場が現れ始めた。

このように農薬問題は徐々に解決に向かっていくが、ゴルフ場は農薬問題の他にも、環境破壊による森林保水力の低下などの問題を抱えている。しかし、経済的なメリットも大きく、単純に悪だともいえない。

そこで、これからのゴルフ場のありかたとして、里山との共存という道を考えていきたい。「人間の手によって管理・活用する二次的自然」という里山の考えをゴルフ場内の森林、ひいては周辺の森林にまで適用し、ゴルフ場に「里山の管理人」としての役割を持たせることができれば、ゴルフ場と自然との共存も可能になるのではないだろうか。

ここで鍵となるのが、プレーヤー側の意識の問題である。プレーヤーが綺麗なプレー環境を求めすぎることなく、ある程度の許容意識を持つことで、ゴルフ場側の負担も減少し、自然環境との共存への道が見えてくるのではないだろうか。

はじめに

第1章 心身二元論から心身相関論へ

第1節 心身二元論から生じた近代西洋医学の問題点

第2節 精神と身体をつながり

第3節 心身相関論にもとづく新たな医療の必要性

第2章 統合医療への歩み

第1節 健康の定義

第2節 治療と治癒の違い

第3節 統合医療—これからの医療のすがた—

第3章 自然治癒力と生命の全体性

第1節 自然治癒力の再評価—統合医療の基盤にあるもの—

第2節 <生への意欲>の重要性

第3節 生命の全体性—ホーリズムの立場から—

おわりに

<要約>

現在では、医療技術の進歩によって、様々な病気を治療できるようになった。しかし、近代西洋医学には限界があり、そのことが問題視されてきている。その原因には、人間の身体を重視し、精神を軽視して、人間を全体としてとらえることなく、部分的に病気を治すことばかりを考えてきたことや、人間にそなわっている健康な状態に戻ろうとする自然の力を助けるという医療の本質を失っているということがあるだろう。そこで、改めて健康や病気がどのようなものなのか考えるとともに、人間を全体としてとらえ、人間にそなわっている自然治癒力や生命の全体性について考えていく。その中で、人間が真に健康に生きていくためにはどのようにすればよいのか考察していく。

第1章では、近代西洋医学の問題点、精神と身体をつながり、治療において患者を精神的に支えることの重要性について述べていき、心身二元論で人間をとらえてきた医学から、心身相関の考えにもとづく医学への変換の必要性について考察する。

第2章では、まず、健康の定義、治療と治癒の違いについて述べていく。そして、新たなこれからの医療のすがたとして統合医療について考えていく。

第3章では、まず、統合医療の治療において基盤にある自然治癒力について考えていく。そして、自然治癒力を引き出し、よりよく生きていくための生への意欲の重要性について述べていく。最後に、これらをふまえて、精神・身体・霊性を合わせた人間の生命の全体性について考察する。

ほとんどの人が、人生の多くの時間を健康に過ごしているだろう。しかし、それは当たり前のことであるように感じるが、本当はそうではない。われわれが健康に生きているのは、われわれには本来、生命の全体性というものがあり、その生命の全体性へと向かう自然治癒力という力がそなわっているからなのである。われわれは、そのことを忘れてはならない。また、自然治癒力を引き出すために肯定的な感情が重要であり、精神が身体に及ぼす影響力の大きさも再評価しなければならないだろう。

健康と病気は相補的な関係にあり、絶対に病気にならない完全な健康というものはない。だから、われわれはいつでも自分自身の生命の全体性に目をやり、必要な時に、その生命の全体性を完全で平衡な状態に戻そうとする自然治癒力を最大限引き出せるようにしなければならない。健康への鍵は、いつでもわれわれ自身の中にあるのである。

はじめに

第一章 現代の食環境

第一節 食環境の現状把握

第二節 変化した食文化

第三節 現代の食が抱える問題

第二章 環境倫理から見る環境汚染

第一節 一次的意味の環境倫理と二次的意味の環境倫理

第二節 世代間倫理の問題

第三節 より大きな善とは

第三章 食環境の改善に向けて

第一節 農薬との決別

第二節 体験から来る食の価値観

第三節 健全な食環境 - 日本の伝統食の持つ良さ -

おわりに

<要約>

私はゼミ活動において、年に一回、合計二回の四泊五日の自給自足生活を経験した。この生活の特徴として、食べ物は自分たちで育てた野菜ともち米のみを使用することがあげられる。食事は普通の生活にくらべ、とても質素ではあるが量、質ともに決して不満を伴うようなものではなかった。私は、この食生活を通して今の日本の食生活に疑問を抱くようになった。実感として得たのは、日本の食生活は無駄が多すぎることである。コンビニエンスストアやスーパーなどは食品に賞味期限を設け、消費者はそれが過ぎればほとんど迷い無く食べ物を捨ててしまう。食べ物を通じて、日本がいかに大量生産、大量輸送、大量消費型の社会であるかを、ゼミ活動における体験を通じて理解した。そして、この社会を維持するために多くの環境が汚染され、そして破壊されている。この卒業研究で食糧問題と環境汚染を取り上げた背景には、上記のような自己の体験が背景にある。

方法としては、まず第一章で「現代の食環境」というテーマにおいて、日本の食環境にスポットを当て、現状把握した上で、その変化を追い、問題点を明らかにしていきたい。第二章では、視野を広げ、環境倫理の視点から食糧問題を絡めながら環境汚染について考察を展開する。それらをふまえ、第三章では、視野を日本に戻しながら日本の伝統的な食の持つ良さを取り上げ、食環境の見直しを行っていく。

人間は他の動物同様に食糧を摂取しなければ、生命を維持することはできない。しかし、日本の行なってきた食糧生産、食糧輸出入、食糧消費は現在大量の無駄を含んでいる。その他に、食生活が抱える問題点として、環境ホルモン、残留農薬、遺伝子組み換え食品などがあげられる。これらの食生活が抱える諸問題を根底から解決するためには、他の環境問題同様に倫理的な解決が必要ではないだろうか。

私は 21 世紀が環境の時代と言われる以上、環境問題から目を背けることは不可能であろうと考えている。また、地球に生きる人類の一員として目を背けてはいけないことであろうという認識がある。この卒業研究では環境倫理の視点から食環境の見直しを試みた。文明がここまで発達した社会では食と言うものが、ただ単に生命の維持行為にとどまらず、ビジネスの問題、倫理の問題を含んでしまうことはいたしかたのないことかもしれない。しかし、他方で食は生命の源であることや食事が貴重なコミュニケーションの役割を果たすということなど、忘れてはならないことにも多く気づくことができた。

はじめに

第1章 日本社会に存在する「母性」性

第1節 「母性」性とは何か

第2節 日本の宗教の「母性」性

第3節 日本人の母性原理

第2章 母と娘の関係

第1節 母と子の結びつき

第2節 母の視点から見た母と娘の関係

第3節 娘の視点から見た母と娘の関係

第3章 現代の母と娘のよりよい関係にむけて

第1節 母と娘の密着関係に対する危惧

第2節 母と娘の絆

第3節 母と娘のよりよい関係とは

おわりに

<要約>

人はみな、母親から生まれる。子は母親の子宮内で約9ヶ月間、母子一体の環境にいる。子は母に包まれて発達していく。子が母親の胎内から出て、最初に関係を結ぶのも母であり、その関係において初めて自分ではない他と相互関係を結んでいく。子が未熟な期間において母親は、重要な人物である。子が成長していく中で、母と子は互いに一緒に行動する時間を縮小していくが、思春期を向かえ、またそれを通り越してゆくと「母」という存在は、大きな存在であることに気がつく。たくさんの時間を過ごすということで思考や生活環境の影響を受けるのは当然である。しかし、そういった意識的なものだけではなく、「母」が時には暖かく、そして時には恐ろしいほどに冷たく感じることもある。これは何なのであるか。ここに、「母性」という概念をとりあげる。その際、日本人の社会において優勢とされる母性原理について触れ、日本社会の「母性」についても考えていく。

「母性」性とは「包みこみ」や「一体」という特徴をもつ。そして、日本は少しずつ変化し始めているが、未だに「母性」性社会にある。たくさんの若者が母親との一体から抜け出せないでいる。親もまた、無気力な子に対し「父性」性による「切断」をしないで、「包みこみ」をしている。相手の心を察しようとする文化の日本は「母性」性の密着の関係性において、自分がそうしたいからするのか、母がそう望んでいるからそうするのか、次第に分からなくなる。母は自分の内に娘を含み、娘は自分の内に母を含むことで、時間から開放されようとする。そのような母と娘の関係性において、自分を縛り付ける者が一体、誰なのか分からないということも起こるであろう。

最近の母と娘の関係性については、心理的距離の近い母娘の様子がみえてくる。主観的に見れば、仲が良く、心地よい関係ということで肯定的にも考えられる。しかし、客観的、常識的に考えてみるとそれは少し近づきすぎのように感じられる。密着の関係性の中では様々な障害も出てくる場合がある。これらは母と娘共に発達を妨げる方向に向かってはいないであろうか。子育ては未熟な子が社会に出られるように、子の発達を親が促すものである。そのためには、両者に距離感が必要となる。この距離感には、客観性が求められる。主観的に見れば、どこまでも甘えた関係も肯定的に見えてしまうが、その甘えた関係を客観的に見られるような機会を持たなければならないのではないであろうか。そうすることにより、親離れ、子離れの過程において密着しすぎず、離れ過ぎずの距離感を測れるのではないかと考える。

はじめに

1. 変容する家族

母性原理に基づく大家族
理想的モデルとしての核家族
実存的対決の場としての家族

2. 家族のしがらみ

なぜ家族がしがらみになるのか
夫婦のしがらみ
親子のしがらみ

3. これからの家族

父性原理優位の場合の問題
父性と母性のバランス
「個」の確立をめざして

おわりに

< 要約 >

家族とは何か、ということ定義するのは非常に難しい。血縁がある、親子である、生活を共にしているなどでは定義できないほど、現在の家族は多様化してきている。未婚率、離婚率は増加し、単身赴任やシングルペアレントなどその形態も様々である。また、幼児虐待、家庭内暴力など家族の中では様々な問題が発生してきた。つまり、家族というものは社会の変動と共に変化するのである。

戦前は、多世代同居の大家族であった。その中では、家父長が権力を持ち、家族を統制していた。しかし実際には、家父長制という社会の制度や通念によって支えられていただけであって、戦後の家父長制廃止によって、見せ掛けの権力を奪われ影を潜めていくのである。そして大家族から核家族へと変化し、家族はますます母性性を強めていった。

ところが日本人は、もともと母性原理に基づいて成り立っていた大家族から核家族へと基本構造を変えずに変化し、西洋の父性原理に基づいて「個」の自立を目指すようになっていった。父性原理の侵入によって、日本の家族の倫理は混乱し、理想とする家族のモデルを失った。おまけに、「個」の確立の基盤となるような社会の規範もできていないのである。そのため、母性原理に基づいている家族の絆や親子の絆が、自立しようとする「個」を包み込み、呑み込んでしまふ、しがらみとなってしまったのである。

このような状況の中で、われわれは何を基準に「個」の確立を目指していけばよいのだろうか。また、それぞれが「個」を確立し、より個性的に生きていくためには、家族はどうあるべきなのか。そして、一人一人が個の確立、真の自立を目指すとともに、多様化する社会や家族の中で、バランスをとりつつ、どのような関係を築いていくことが大切になってくるかを考察したい。

はじめに

第一章	色の仕組み
第一節	色とは何か
第二節	色と光
第三節	色彩の比較・イメージ
第二章	色彩が与える人への影響～ゲーテ『色彩論』を手がかりに～
第一節	生理的色彩～眼の役割～
第二節	色彩の相互作用
第三節	色彩の隣接性～光の重要性～
第三章	現代生活における「色彩環境」がもつ力
第一節	広がる色彩環境の中で
第二節	個々の色彩から全体の色彩として
第三節	豊かな色彩環境へ向けて

おわりに

<要約>

私は現代の生活の中で色彩というものが非常に大きな役割を果たしていると考え、そこで色彩とは何か、色彩とはどのように捉えられているのか、日常生活での色彩の役割とはなにかということについて考えてみた。第一章では、普段何気なく眼にしている色彩も、実は色々な仕組みがあって発見され生じていることを述べている。第二章では、ゲーテの『色彩論』をもとに眼と光と色彩の関係と重要性について展開している。第三章では、私たちが日常生活の中で色彩をなぜ取り入れ、受け入れているのか、色彩の必要性和それが持つ意味ということについて述べている。

色のない生活が想像できますか？色のない世界とはモノトーンの世界、いわゆる白と黒の世界です。私たちは色彩があるから風景を見て楽しむことができ、物を見て暖かいと感じたり冷たいと感じたりすることができる。言葉にして表現することも可能であり、自分を色で表現することも可能なのではないだろうか。

私たちはこのような色彩を毎日眼を通して受けている。眼というものは色彩を感じ取る身体の中で最も重要な身体器官である。しかし眼があるだけでは色彩はうまれない。色彩は光によってこの世に存在するからである。その光の明・暗によってさまざまな色彩となって私たちの眼に残されていくのである。

このようにして生み出される色彩の意味を考えたことがあるだろうか。公共物にしても自分の身の回りのものにしてどこか共通点があったりそのものもつ意味というものがあるだろう。私たちがファッションに気を使うのも決して姿かたちだけではなく色彩も大きく影響しているだろう。だからこそ色彩の使い道を間違えてはならないのである。自由に使用することが本来色彩のもつ意味ではないからである。衣・食・住に欠かせない色彩の意味を考えながら使用してほしいと思う。それは生きていくうえで色彩が私たちの生活環境に大きな影響力を与えると考えられるからである。

はじめに

第一章 身体におけるコミュニケーションをめぐって

第一節 言語的コミュニケーション

第二節 コミュニオン 非言語的コミュニケーション

第三節 身体におけるコミュニケーションの課題

第二章 身体の再評価

第一節 五感を通じた感覚

第二節 共通感覚 五感を貫き統合するものとして

第三節 身体の再認識

第三章 感性の覚醒のために

第一節 感性 身体とその環境の統合

第二節 言語表現と身体表現

第三節 受動的な感性から能動的な感性へ 豊かなコミュニケーションを目指して

おわりに

【要約】

私たちは人とのコミュニケーションの手段として主に言語を使用しているが、実際にはそればかりでなく、表情や身振り、声の調子などの非言語的なコミュニケーションも行なっている。しかし、私たちは現代社会の中において、言語表現に頼りがちになり、身体におけるコミュニケーションの重要性を見落としてはいないだろうか。コミュニケーションの際に、相手の身体表現を見落としてしまっているために、他人の気持ちがわからなかったり、対人関係がうまくいかなかったりすることが起こるのではないかと考えられる。

また、現代において私たちは、身近な自然を感じることから離れ、自然とのコミュニケーションが希薄になっており、生活の中で人と自然との間に距離感のような疎外が生まれ、それが自然環境を省みない行動につながってはいるのではないかとと思われる。

このようなことから、人と人、人と自然との間において身体を通じたコミュニケーションの必要性を感じる。そこで、自己と周りの環境をつなぐ身体を再評価し、身体を通じた感覚や感性を見直し、感性を高めることが必要だと考える。

そこで第一章では言語的コミュニケーション、コミュニオンについて取りあげ、そこから身体におけるコミュニケーションの課題を探っていきたいと考える。第二章では身体を通じた感覚を取りあげ、身体の再評価を行なう。第三章では身体に伴う感性や表現することについて考え、身体におけるコミュニケーションにとって何が必要とされるのかを探っていきたいと考える。

身体におけるコミュニケーションを振りかえってみると、言語による思考に慣れすぎてしまい身体性が軽視されていることや、五感のバランスが崩れていることなどが問題点として挙げられる。

それに対して、身体性を見直し、五感を組み換えるためには体性感覚を含む触覚による統合が必要であると考えられる。私たちは触覚を基体とする諸感覚の統合によってこそ他の人間や自然と共感し一体化することができるのである。そこには共通感覚がはたらいている。また、感性は身体と環境を統合するものであり、感覚との相互作用で高めることができるものである。

コミュニケーションはその相互的なはたらきかけという面から受動性と能動性が指摘される。私たちの身体では感応的同調というはたらきかけの上に、しぐさや表情といった非言語的コミュニケーションが成り立ち、さらに重ねて言語的コミュニケーションが加わることによって私たちのコミュニケーションはより緊密で豊かなものとなっている。

身体におけるコミュニケーションにとって大切なのは五感を統合し、自分の身体、相手の身体に耳を傾け、メッセージを受け取り内面化することができる感性を身につけることではないだろうか。

はじめに

第一章 環境破壊による生態系の崩壊

第一節 野生生物にみる環境問題 - 奇形ザル問題を例に -

第二節 生態系の理論

第三節 生態系の崩壊

第二章 種の絶滅

第一節 絶滅した野生生物たち

第二節 大量絶滅の時代を超えて

第三節 人間中心主義という思想

第三章 野生生物と共生するために

第一節 稀少種の保護

第二節 生物の多様性の重要性

第三節 人間中心主義から生命圏平等主義へ

おわりに

<要約>

今日の私たちは、物にあふれ、欲しいものは何でも手に入るような便利で快適な生活をしている。このような生活が出来るのは、今日に至るまでにさまざまな分野で、研究や開発がなされてきたからであろう。しかし、その研究や開発が進む一方で、環境の分野における負の成長は著しいものであった。

環境の悪化が問題となる領域は、大気、海洋、淡水、土壌、森林などさまざまである。そして、ここで何より注目したい点は、これらの領域に野生の生物が存在しない領域はないということである。全ての領域に野生生物は存在し、その領域独自の生態系を創り上げている。しかし、人間が進めてきた環境破壊は、自然や野生生物が創り上げたこうした生態系を時間をかけてじわじわと、また時にはいとも簡単に壊してしまう。

今になって環境問題が、数多くのメディアでも取り上げられるようになり、人々の環境に対する関心は高まった。しかし、関心が高まっただけでは問題は解決しない。自然生態系で今、実際に起こっている異変を慎重に受け止め、「なぜそのような事が起こったのか」、その問題ときちんと向き合うことが大切である。

そこで、このような、もしくはこれからますます発展していくであろう私たちの生活環境の中で、人間と野生生物が互いに共生していくためにどうしていけばいいのかを考えていく。

第一章では、実際に見てきた奇形ザルの問題を例に取り上げ、環境問題が野生の生物に及ぼす影響(生態系の崩壊)を生態系の理論を踏まえながら見ていく。

第二章では、生態系の崩壊の行き着く先の一つである、種の絶滅について、これまでに絶滅してしまった種、今現在の状況、そしてなぜ絶滅というものが起こってしまったのかについて見ていく。

そして、第三章では、そのような環境の中で、野生生物と共生するために大切なこと、また私たちがしなければならないことを、このテーマの結論として見ていく。

はじめに

第一章 身体感覚の見直し

第一節 生活環境の変化における五感の喪失

第二節 環境における動物の感覚

第三節 視覚と諸感覚の関連性

第二章 身体のありかた

第一節 身体と心の関連性

第二節 同調と共感—心と体を通じて—

第三節 身の広がりと外界との統合—感覚を通じて—

第三章 自然における共通感覚の覚醒

第一節 共通感覚とは

第二節 自然の一部としての人間

第三節 自然と人間との一体化—共通感覚を通して—

おわりに

<要約>

現代の私たちの生活は便利になるにつれて身体感覚が軽視されているのではないかと考えた。そこで、身体感覚を用いることで広がる感性や動物や木々など自然と通じ合う可能性について考え、身体感覚が外界と身体を結びつけ、全ての感覚を統合することで共通感覚をもち、動物や自然と語り合うことができるのではないかと述べている。

第一章では人間の生活環境の場が自然から離れてしまったことによって、自然と触れ合うことが少なくなり、人間と自然を分離してしまったことで感覚を用いて自然を感じることを失いつつある現状を述べ、身体感覚の見直しをすることで、五感を使う意識が薄れつつあることや諸感覚とのつながりを通して、感覚同士の関わりについて取り上げ、研ぎ澄まされた感覚をもった動物のもつ第六感について考えている。

第二章では身体と心の関係性について考え、身の広がりを通して外界との結びつきの間で感性を覚醒させることについて述べている。

第三章では共通感覚とはどのようなものであるかについて考え、共通感覚を通して人間と自然との語り合いの可能性を述べている。

はじめに

第1章 人間と生命の視点から見る自然—生命中心主義へ移行—

第1節 人間中心主義からみる環境問題

第2節 生態系中心主義から見る環境問題

第3節 人間中心主義から生態系中心主義へ移行—新しい環境倫理の模索—

第2章 悪化していく自然環境の現状

第1節 利己主義が環境悪化を助長させる

第2節 科学技術がすべてを解決することはできない

第3節 限界のある地球

第3章 五感の覚醒—共通感覚を通じて—

第1節 諸感覚の統合—共通感覚論の観点から—

第2節 五官を通じたネイチャーゲーム

第3節 五感の覚醒

終わりに

<要約>

私たちの住む地球は今、限界を超えようとしている。環境問題が世界中で関心を持たれもうずいぶんと時間が流れた。それなのに私たち人間は自分の利益だけを追求しすぎて、結局は自然を省みず、環境破壊を常に続けていた。そのように生活してきたツケが今まさに回ってきている。そこで私たちがすべきこととは何かを考える。なぜここまで環境が悪化するまで人間は何も行動を起こすことをしなかったのでしょうか。科学技術が発展した結果、私たちの生活が非常に便利なものになったことはいまでもない。だが、そこで起こりうる環境問題が、同じ科学技術を発達させることによって解決することは表面的にはできても、問題の本質を解決することになってはいないことに人間は気づいていない。同じようなことが未来でおこらないためにも、地球の限界性についても述べて、環境問題の解決に向けて私たちのライフスタイルの見直し、環境に対する意識や行動について見直すことを述べる。

第1章では環境問題の起きた理由が人間中心主義の考え方から生まれ、その問題点を考え、人間中心主義が人間の利益を優先させることに注目して、環境問題を捉えて論じる。また生命中心主義の考え方にも触れて自然の権利の是非を問う。そして環境問題の解決に向けて、人間はどちらの主義を選ぶのか。新たな環境倫理についても触れる。

第2章では人間が、人間以外の存在を食物のように人間の目的のために手段としての道具的価値しか持たないと考えてきたことに、環境破壊の原因があると考えられる利己主義の問題点に着目する。そしてそれらの環境問題の具体例をあげていき、問題意識を深めていくことを述べる。

第3章では第2章であげた問題点の中から化学物質の怖さに触れ、これからの私たちのライフスタイルをどうしていくかを述べていく。

そしてわれわれはどう行動を起こすのか、限られた時間のなかで、限られた状況の中で選ばなければ成らない状況にいるのだ。地球環境問題解決は地球規模で対処して、全員で危険を負担しなければならない。このようにしてさまざまな問題があげられてきたが、これほどまでに環境問題を世界中で取り上げ、私たちひとりひとりが問題解決に向けて、小さなことから少しずつはじめていく。それなのに世界の豊かな国はまだ自分たちの国の利益を優先している。今以上の生活をまだ求めていこうとする人間はかなり罪深い生物だと考える。私たち人間はあくまでも自然の一部なのだ。だからこそこのような自然を支配しているような行動は正さねばならないと私は考えている。自然に感謝する気持ちを忘れずに、未来世代のためにも私たちは今から行動を起こす必要がある。そして地球上の人々すべてが安心してらせるようになり、環境問題が無くなっていけばいいと思う。人間が自然への感謝を忘れたところにまた環境問題は生まれてくると私は考えている。だからこそ今から行動していきたいと思う。たとえその行動が小さくても、いずれ大きくなり世界中が行動を起こすようになることを私は信じている。